

# 発明文化論

〈第80回〉

丸山 亮

## 縄文の文化

縄文という時代は、人の暮らしを変える発明の爆発期だった。青森県の三内丸山に千葉県のかづ利貝塚と、国内を代表する縄文の遺跡を2つ続けて見てそう思った。

縄文人は前時代と異なり、暮らしやすい場所に定住するようになる。三内丸山は海に近く、海と陸からの収穫を得るのに有利な場所だった。前期から中期にかけて、ここの集落は千年以上も続いたと推測されている。かづ利もやはり海に面していて、豊富な貝を得ていたようだ。定住地には住居跡が残され、それぞれの遺跡で復元が試みられている。

三内丸山では、高床式で掘立柱の大きな建物が復元された。柱穴はほぼ35センチの単位で位置決めされていたらしく、柱穴には直径1メートルものクリの木柱が残っていた。こうした建築材料を切り出す道具や方法がなくてはならず、石斧は先端が薄く尖った磨製に改良されている。

食糧を得るためには狩猟や漁労が盛んに行われ、効率のよさそうな弓矢や釣り針、銚などの出土品がそれを裏付ける。縄文人は今の我々から見ると相当な珍味を口にしていたらしい。三内丸山では、ノウサギ、ムササビ、マダイ、ブリ、サバ、ホシザメ、ヒラメ、ニシンなどの骨が出土する。

もちろん食材を煮炊きする土器の改良も進み、用途だけでなく、そこには装飾も加わることとなった。縄目によって飾る縄文の技法はこの時代と文化を総称する用語ともなっていく。美的な感性はさらに、さまざまな工芸品の製作にも向けられている。イグサのような植物で綾織りの籠を編んだり、漆器の生産も始めた。しかもその漆は、栽培されていたようだ。

かづ利貝塚の断面を露出させたところを見ると、貝層の厚さは相当なものだ。直径100メートルを超える環状の巨大な貝塚は、大量にとれる貝を集団で加工する場があったことを推測させ、その貝を近隣に供給していたらしい。三内丸山に復元された大型の住居内でも、土器や道具作り、食料の加工、編み物などが共同で行われていたと思われる。

物的な生活が豊かになっていくのと並行して、縄文時代には精神生活も深化していく。妊娠した女性の顔や乳房などを示した手のひら大の土偶が、両遺跡に共通して見ついている。これは安産を願う呪術の補助具であったのだろう。盛土の遺構から土器や玉などとともに出てくるところから、何らかの儀礼が行われていたと考えられる。

三内丸山の集落には道路が造られ、道の両側には墓が連なっていた。それらは居住域から一定の距離を置き、死者への思いが感じられる。もっとも子供が死ぬとこの墓ではなく、土器に入れられて大人の墓地の近くに埋葬され、さらに土器の底には意図的に穴がけられていた。それはかづ利でも見つかっており、埋葬の風習が距離を隔てて共通していたことに驚かされる。

ところで三内丸山を中心に青森、秋田、岩手と北海道の南部には縄文の遺跡群が集中しているので、これらをまとめて世界遺産への登録をめざす動きもある。縄文人の信仰に関係がありそうな、中央の石柱を環状にとり囲んだ日時計型の配石は、この地域に共通するようだ。さらに国内各地で類似のものが見つかるほか、同時代と推定されている周辺のアジア諸国の文化でも認められる。土器の形態は平底で文化間に差がないが、周辺の文化では縄文の装飾を欠くなどの違いもある。こうした異同を比較してみるためにも、北海道・北東北の縄文遺跡群が世界遺産に登録されることを応援したい。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)